

令和7年度第5回 静岡市立の高等学校の在り方検討委員会 会議録

- 1 日時 令和8年1月21日(水)14時00分～16時00分
- 2 場所 静岡市役所清水庁舎 3階 第1会議室
- 3 出席者 (委員)村山委員長、志村副委員長、佐野委員、高畑委員、溝上委員
(オブザーバー)4人
(事務局)中村教育長、増田教育局長、西島教育局次長、
小澤学校づくり推進監
教育総務課(6人)、プロジェクトチーム(7人)
- 4 傍聴者 13人
- 5 議題 (1)【共有】これまでの振返りについて
(2)【報告】「静岡市立の高等学校の在り方に関するアンケート」の実施結果について
(3)【協議】「静岡市立の高等学校の高等学校の在り方に関する提案書(最終案)」の検討及び決定について

6 会議内容

(1)【共有】これまでの振返りについて

①静岡市立の高等学校の在り方検討委員会について (事務局による説明)

第1回から第3回までの検討を振り返り、市立の高校の役割を「量的供給」から「質的供給」へと転換する意義や新しい静岡市立の学校の基本理念を共有した。また、設置形態を中高一貫校と全日制単位制高等学校に絞り込んだ経緯について説明した。

第4回においては「国際グローバル」や「情報・理数」を学びの柱に据えることや、1学年8～10学級を上限とする適切な学校規模についても合意を得た経過を総括した。

②県立高等学校の在り方に係る地域協議会について (県教委による報告)

将来の少子化を見据えた公立高校の段階的な再編・集約方針を提示し、特に小規模校の整理を優先的に進める考えを示した。今後は、市独自の検討結果や広域的な教育指針を踏まえつつ、市と歩調を合わせて具体的な将来像や実施スケジュールを具体化していくと総括した。

(2)【報告】「静岡市立の高等学校の在り方に関するアンケート」の実施結果について

事務局は、市内小中学生の保護者約8,000人を対象とした調査結果を報告し、検討委員会が提案する中高一貫校や全日制単位制高等学校といった設置形態に対し、約9割の保護者から肯定的な支持が得られたことを説明し、検討委員会の方向性と将来世代の生徒保護者の考えに乖離がないことを説明した。

また、自由記述においては中高一貫教育による受験負担の軽減や個性の伸長に期待が寄せられた一方で、6年間の人間関係の固定化や単位制における自己管理能力への不安といった具体的な懸念事項も示された。今後は寄せられた多様な意見を具体的な学校設計や周知活動の重要なヒントとして活用していく方針であるとの考えを示した。

(3)【協議】「静岡市立の高等学校の高等学校の在り方に関する提案書（最終案）」の検討及び決定について

①視点の転換（「教える側」から「学ぶ側」へ）

提案書の記述を、教員がいかに関えるかという「手段」の説明から、生徒がいかに関目標に到達するかという「教育の価値と結果」を重視した表現に変更することが合意された。

- (村山委員長) ● これまでの議論の経緯を踏まえ、教える側の視点ではなく、「生徒がどのように学ぶか」という視点で記述すべきである
- (高畑委員) ● 案文にある「自己決定の積み重ねが余白を生む」という記述について、論理的なつながりが不十分ではないか
- (溝上委員) ● 因果関係が逆であり、「学校が設定した余白があるからこそ、生徒が自己決定を行える」というロジックに整理すべきであり、読者に誤解を与えない配慮が必要である

②用語の精査と論理的整合性

「余白」や「個別最適な学び」といった、近年の教育現場で注目される用語の使い方について深い議論がなされた。

- (高畑委員) ● 「多様な背景を持つ他者」という表現は距離感があるため、「人々」や「仲間」といった温かみのある言葉に直すことが望ましい
- (溝上委員) ● 文部科学省の最新の動向を踏まえ、「個別最適な学び」という用語が孤立を招く懸念がある
- 「個に応じた指導」へと整理されつつある現状を指摘し、行政文書として時代に合わせた適切な言葉選びが必要である

③静岡市としてのアイデンティティの付加

新しい静岡市立の学校において中核となる学びとして掲げる「国際グローバル」「情報・理数」について、静岡市で学ぶ必然性を明記すべきという議論がなされた。

- (村山委員長) ● 静岡市が製造業や清水港、物流拠点を擁する「産業のまち」であることを明記したい
- その文脈があつてこそ、グローバルや情報の学びが静岡市の未来に必要なものであるという説得力が生まれる
- (志村委員) ● 委員長の提案に賛同し、「Ⅲ-4 新しい学校における学び」において、市の特色を書き加える必要がある

④設置形態ごとの強みの明確化

中高一貫校と単位制高校、それぞれのメリットをより明確にするための議論が行われた。

- (村山委員長) ● 中高一貫校（6年間）の強みは、時間をかけて地域への愛着（シティズンシップ）をじっくり育める点にある
- (志村委員) ● 現行の市立の高校（商業科など）が培ってきた地域企業との連携などの実績を強みとして盛り込むべきである
- (佐野委員) ● 単位制高校の記述が中高一貫校に比べて簡潔すぎるので、中高一貫校に合わせた表現にするべきである